

子供たちはどこへ消えるのか

——都市伝説生成の背景を探る——

渡 辺 良 智

〔キーワード〕 子供の誘拐、臓器売買、都市伝説、噂

一

一九九五年の秋頃から、「東京デイズニールランド(TDL)に遊びに行った子供が誘拐されそうになった」という怖い噂が流れている。誰かが何らかの目的でこのような噂を流したのか、それとも自然発生した噂なのか、明らかではないが、二十一世紀に入った現在でもこの噂は流布し続けている。一時的な噂として消滅しないで、都市伝説として生き延びているのは、この噂が現代社会のある側面、現代人に特有なある心理を表わしているからであろう。というのは、G・オールポートとL・ポストマンの流言の流布量に関する有名な公式、 $R = \frac{1}{2} \times \frac{1}{2} \times \frac{1}{2}$ (ある事柄に関する流言の流布量は、その事柄の重要さとその事柄に関する情報の曖昧さの積に比例する)を、 $R = \frac{1}{2} \times \frac{1}{2} \times \frac{1}{2}$ (ある事柄に関する情報の曖昧さと人びとがそれについて感じる不安の積に比例する)に修正したR・ロスノウの公式⁽¹⁾が正しいとすれば、この噂の流布は、TDLという日本にありながら日本ではない異界に対して一般の人びとが感じている漠然とした不安を表わしているのかもしれない。

この噂が何を意味しているかは、後で取り上げることにして、本稿ではこの都市伝説生成の背景を探ってみたい。アメリカの民俗学者J・ブルンヴァンは、現代アメリカの都市伝説を収集して『消えるヒッチハイカー』『赤ちゃん列車が行く』などの本にまとめているが、噂や都市伝説に対するジャーナリストと民俗学者のアプローチを対比している。それを参照してみよう。

「新聞記者のやり方は、情報を持つ人びとにインタビューして、引用できる言葉を引き出し、その話の真の源と呼べるものに返ろうとすることである。これに反し、民俗学者は、伝説の本源はとうの昔に失われていることがわかっている。まず入手可能なヴァリアントをすべて収集し、関連のある研究書を書誌学的に調査し、今日のニュースよりもっと広い脈絡においてフォークロアのテーマ、モティーフ、機能を比較しようとするのだ。」⁽²⁾

本稿でも民俗学者のこのアプローチにならって、まずTDLの噂のヴァリアントから取り上げてみよう。

二

筆者の気付いた順にTDLの噂の言説をあげてみたい。すべて新聞、週刊誌、本、テレビなどのマス・メディアで伝えられたものである。

(1) TDL舞台に誘拐ミステリー!?／噂、デマが飛び交って大騒ぎ

東京から遊びに行った子供がトイレで注射され、髪の毛を切られて連れ去られそうになった。犯人は東南アジア系のグループで、子供の臓器売買が目的らしい。

〔「日刊ゲンダイ」96・6・10〕

(2)「夢の世界」を襲う『恐怖』／検証・東京デイズニールランドのウワサ

①小学五年生の男児が両親とデイズニールランドに出掛けた。一人で別行動して一時間過ぎても待ち合わせ場所に来ないため、デイズニールランド側がゲートを閉めて捜した。男児は髪の毛を刈られて麻酔薬を注射され、ベビーカーで連れ出されようとしていた。犯人は日本人男性。臓器売買のターゲットにされた。デイズニールランド側は「最近よく起きている」と説明した。

②デイズニールランドのトイレで、小学校高学年（中学生の例も）の女児がいなくなった。両親がデイズニールランド側に捜索を依頼、ゲートを封鎖して捜した。係員が挙動のおかしい人を見つけ、その人が女児を連れていた。ヘアスプレーで髪を染められ帽子をかぶせられたうえ、服も取り換えられていたが、靴で分かった。犯人は東南アジア系で、女児がトイレから出てくるところを突き飛ばし、薬で眠らせた。

〔東京新聞〕97・1・13

(3)「園内で子供誘拐」。東京デイズニールランドを悩ませる「奇っ怪な噂」

一人でトイレへ行った六歳の男児が、いつまでたっても戻って来ない。両親の依頼でデイズニールランド側はゲートを封鎖して捜索。子供は、東南アジア系の男性が抱きかかえて連れ出す寸前に親が発見。髪を刈られ、服も着替えさせられていたが、靴が同じだったので、気づいた。臓器売買が誘拐の目的だった。（子供の髪がスプレーで染められていたり、睡眠薬で眠らされたり、男児でなく女の子、六歳でなく六年生とか、犯人が中近東系という話もある。）

〔週刊文春〕97・2・6

(4)東京デイズニールランド あなたの知らない凄い噂

(2)の①の紹介

〔宝島〕97・3・5

(5)現代版「神かくし」急増で囁かれる「人さらい」の恐怖／

場所はある有名な遊園地。迷子になった子供を言葉巧みに誘い出し、園内で服を着替えさせ、カッターまでつけて連れ出そうとした。幸い、出口付近で両親が取り押さえて未遂に終わったが、この遊園地には赤ん坊をポストンバッグに入れて連れ去る連中もいるという。客が減るのを恐れて、遊園地側では、ひた隠しにしているようだ。幼児略奪犯の目的は、臓器売買絡みではないか。

〔週刊大衆〕97・12・22〕

(6)いまや主婦の間では定番のウワサ『東京デイズニールランドは誘拐天国!?』

友人夫妻がデイズニールランドに行った際、五歳になる長男がトイレに入ったきり姿を消した。スタッフに迷子になった場所を伝えると顔色が変わり「誘拐の可能性がある」とすぐにすべての出口でチェックが行なわれた。すると東南アジア系の男に連れられた子供が発見され、服装、髪形まで変えられていたが、間違いなく友人夫妻の長男だった。犯人は国際的な児童臓器販売組織。

〔スコラ〕98・11・26〕

(7)大マスコミが報じない戦慄の実態／「消えた子供たち」

都内の遊園地で四歳の娘をひとりでトイレに行かせ、母親がトイレの前で待っていた。いつまで待っても娘が出てこない。中を見にいても娘の姿がない。すぐに従業員に連絡し、二ヶ所ある出口で不審な人物や娘が出てこないかと待ち伏せた。すると、そこへ30代半ばの東南アジア系男女が、ぐったりした小さな子供をおんぶして出てきた。子供には頭から親が着ていた上着がすっぽり被せられ、顔は見えない。しかし、靴下がその日娘にはかせたものと気づいた母親が、「あれ、うちの子の靴下だ」と叫び、その男女は御用となった。連れ去ろうとした目的は明らかではないが、その男女は、クロロホルムの小瓶を隠し持っていた。〔女性セブン〕99・9・30〕

(8)子どもが消える！

夏休みに父、母、姉、弟の四人で例の遊園地に出かけた。弟一人でトイレに行かせた。かなり時間がたっても出てこない。父親がトイレの中を見にいったが、いなかった。すぐに迷子係の事務所に行き、息子を探してもらったが、一向に見つからない。迷子係は、出口を封鎖し園内を徹底的に搜索した。やがてアラブ風の装束をまとった外国人観光客の団が出口に現われた。その中にぐったりとした感じの男の子が混じっていて、両側を大人に支えられるようにしてかろうじて歩いている。母親がみると、その男の子は、息子が数日前に買ったのとまったく同じ靴を履いていた。もしや、と思って男の子に駆け寄った母親は、頭のローブをはぎ取った。するとそこには、髪の毛を金髪に染められてしまった息子の姿があった。何かの薬物を与えられたらしく、焦点の定まらない視線をあちこちに泳がせている。外国人観光客たちはその場で取り押さえられ、誘拐されそうになった男の子は無事保護された。

男の子が医務室で手当を受ける間、両親は奥のオフィスに通された。そして、上層部の男性から、お詫びのしるしとして十年間有効の家族全員分の招待券をもらい、本日の件は内密にするよう依頼された。

(作務和一『恐怖の都市伝説 子どもが消える』廣済堂文庫、99・11)

(9)「恐怖の噂」

ある有名な遊園地に母親と一緒に女の子がお気に入りの靴をはいて遊びに行った。女の子がトイレに行きたいといって一人で入った。しかし、母親がいつまで待っても出てこない。トイレを探してももぬけのからだだった。そこで、係員にいうと驚きもせずまたかという表情をし、「落ち着いて下さい。これは誘拐の可能性があります。もう一度、娘さんがいなくなった場所に行ってみましょう」といった。そのトイレへ行った。その時、男の子を

抱きかかえた男性がトイレから出てきた。しかし、男の子のはいっていた靴は、まさしく女の子のはいっていた靴だった。男に抱きかかえられて眠っていたのは、男の子の格好をさせられた自分の娘だった。この遊園地では誘拐団が暗躍し、一人でトイレに入った子供を眠らせると、臓器移植のために連れ去ってしまうという。

〔回復！スパスパ人間学〕、TBSテレビ 00・11・16放映〕

⑩噂のメカニズムってあるの？／遊園地誘拐事件

ある若い夫婦が、幼い娘をつれて、とある有名な遊園地に行った。ところが混雑の中、娘の姿を見失ってしまった。遊園地側は迅速に対応して出口を一つにした。出口を見守っていた母親が叫んだ。「あ！あそこに！」母親の指さす先には、外国人とおぼしき男性が、腕にはぐったりとした男の子を抱いていた。しかし取り押さえて確認してみると、確かにいなくなった女の子だった。洋服は男の子のものに取り換えられ、髪の毛の長さをごまかすために野球帽をかぶせられていたが、靴だけは自分の靴をはいていた。母親は、靴を見て即座に自分の娘と見破った。結局取り押さえられた犯人は、闇の臓器ディーラーだったと分かった。それも女の子のものが、東南アジアの某所で、高く取引されているという。

〔「ダカーポ」01・5・4〕

⑪遊園地の恐怖

ある家族が遊園地に出かけた。両親と男の子二人の四人連れだった。長男と父親がトイレに行っている間、母親と次男はベンチで待っていたが、母親は一瞬寝てしまい、次男を見失ってしまう。すぐに迷子案内に行ったが、次男は見失されない。遊園地の職員は出口を一ヶ所以外全て封鎖し、両親と共に出口を監視していた。閉園時間になろうとした時、そこに娘を連れした親子連れがやってきた。髪形も服も次男とは全く違っていった。ただ、履い

ている靴が同じだった。母親は駆け寄って、その父親が抱いていた娘の帽子を取った。すると髪の毛がどさっと落ち、次男の顔が現われた。かくして犯人は逮捕された。

睡眠薬を飲ませ眠ったところを、カッターと服で姿を変え、親子連れを装い密かに遊園地を抜け出そうとしていたのだ。取り調べの結果、犯人は臓器を非合法に売るシンジケートの構成員で、この手口で幼児を数多く誘拐、臓器だけを切り取り世界中に売りさばいていたというウワサが広がった。

(木原浩勝他『都市の穴』双葉社、01・9)

(12)遊園地の人さらい

(8)とほぼ同じ内容

(宇佐和通『あなたの隣の「怖い噂」』学習研究社、02・7)

以上の(1)から(12)の噂⁽³⁾は、基本的に同じ話の構造をもっている。それは、「東京デイズニールランド(あるいは某有名遊園地)に遊びに行った子供が、一人でトイレに行ったとき行方不明になる。デイズニールランド側は出口を閉めて捜索、出口で麻醉薬を打たれてぐったりした子供を連れた東南アジア系(アラブ風)外国人が捕まる。子供は髪が刈られ(髪の色を変えられ)洋服を着替えさせられていたが、履いていた靴(靴下)が同じだったので、気づいた。誘拐の目的は臓器売買だった」というものである。さらに、噂の本筋を進めれば、「トイレに入った子供が麻醉薬を打たれ、誘拐されるようになる。髪は変えられていたが、靴(靴下)が同じだったので、発見される。誘拐の目的は臓器売買」となる。(5)と(7)から(12)の噂においては、ある遊園地でと東京デイズニールランドが明示されていないのは、この噂では、誘拐事件の発生地点は、重要ではないからと考えられる。

ところで、ある場所で麻醉薬を打たれて誘拐されるという噂といえば、「オルレアン⁽⁴⁾の噂」が想起される。一九六

九年五月、オルレアンで、まちの中心街で婦人服の店を所有している商人たちが、女性誘拐をしているという噂が広まった。誘拐を噂された洋服店はすべてユダヤ人の所有し、経営するものだった。

若い女性たちが洋服を試しに試着室に入ると、催眠性の薬物がうたれる。こうして眠らされたあとで地下室へ移され、夜の間にどこか外国の売春街へ向け運びだされたという。⁽⁴⁾

オルレアンの噂のブティックの試着室をTDLのトイレに、若い女性を子供に、そしてユダヤ人を東南アジア系外人に変えれば、TDLの子供誘拐の噂になる。ただし、誘拐の目的は、売春のための人身売買でなく、臓器売買のためである。

それでは、TDLの子供誘拐の噂は、オルレアンの噂の新バージョンなのだろうか。オルレアンの噂が日本に入ってきて、消えた新妻の噂として広まったことも確認されている。それはつぎのような噂だった。

ある夫婦がバりに新婚旅行に出かけた。奥さんが一人でブティックの試着室に入った。旦那は店の外で待っていたが、いくら待っていても妻は出てこない。店員に尋ねると、もう店を出られたと言われ、それきり行方不明になった。その後、東南アジアで手足を切られて見世物小屋にいるところを発見された。⁽⁵⁾

この噂でも若い女性がブティックの試着室で消えるのだが、麻酔薬を打たれてではなく、試着室の床が抜けたり、壁が一回転したりして消えてしまう。また、ユダヤ人が言及されることはなく、バリ、ニューヨークなどで消えて東南アジアで発見されるに変わっている。手足が切られているのは、話を面白くする効果を高めるためであろう。この

噂がそのままTDLの噂に変容したとは考えられない。やはり麻酔薬、誘拐、臓器盗難といった要素を含んだ、類似する噂話を追跡してみたら、先ほどの疑問に答えることにしたい。

そして、オルレアンの噂の変形したものかもしれないが、中央・東アフリカで日頃男性客に虐待されている売春婦たちが愛好している話はどう語る。

ある都会の売春宿へ何の疑いもたない男たちが誘い込まれる。畏のドアを隠している椅子に腰掛けると麻酔薬が飲まされる。畏は意識を失っている男たちを地下室へ落とす。そこで彼らは手術を施される。血が抜かれ、皮膚がはがされ、臓器を抜き取られるのだ。⁽⁶⁾

この話の中では、男性が麻酔薬で眠らされて臓器を盗み取られて、売春婦たちの意識の中で復讐されている。

ところで、大人が腎臓などの臓器を盗み取られるという噂になると、ヨーロッパ、アメリカ、そして日本でも聞かれる。さらに、臓器売買のために子供が誘拐されるという噂は、中南米やヨーロッパでも聞かれるのである。これらの噂もTDLの噂の原型の候補になりうるのである。

三

TDLの噂は、アメリカの都市伝説が日本に入り、広まったものだという説もある。まず、この説から検討してみよう。

たしかに、アメリカのデパート、大型スーパー、ショッピング・モール、遊園地で起きる子供誘拐の噂はTDLの

噂に先行している。

J・ブルンヴァンによれば、一九七六年頃から大きな遊園地で子供が誘拐されたという噂話が各地で広まっていて、カリフォルニア州のデイズニールランドもその噂の舞台になっていること、その犯人は旅行者やよそ者とされていることが、明らかになっている。⁽⁷⁾そして、TDLの噂とよく似た噂も流れていた。

ある十代の少女がデパートか郊外のショッピング・モールで買物をしている時に誘拐されそうになった。誘拐しようとした男は麻酔で彼女を眠らせた。そして、彼女の両親、あるいは店の警備員が救出にやって来た時、逃げ去ってしまった。⁽⁸⁾

さらに、ブルンヴァンは、現代の恐怖伝説として、これまで取り上げてきた「誘拐未遂」の他に「体の一部を切り取られた男の子」といった、化粧室にまつわる伝説をあげている。後者では、被害者は金髪の白人で、攻撃者は黒人メキシコ人などの少数派の人種である。この種の恐怖伝説は、世界中で少数派の共謀をテーマとし、「あの人びとに注意せよ、彼らは私たちをやっつけようと徘徊しており、もっとも無防備な場所です、一番嫌な方法でわたしたちに攻撃をしかけてきそうである」というメッセージを伝えている。また、「わたしたちが楽しめる環境や中産階級の安全な商業センターで警告なく攻撃してくるであろう」とも伝えている。そして、この伝説は、中世以降ヨーロッパに広まっている、ユダヤ人がキリスト教徒の子供たちを儀式で拷問したり殺したりするという、偏見にみちた話につながっていることをブルンヴァンは示唆している。⁽⁹⁾

彼は、一九八六年に出版された本の中でも「誘拐未遂」の話を取り上げているが、「たいていのバージョンでは、デパートの出口に鍵がかけられたこと、行方不明の子供がトイレで見つかったこと、子供の髪が刈られたこと（しば

しば髪が染められたこと)、子供の衣服が着せ替えられたこと、事件はデパート、警察、あるいは報道機関によっておそらくもみ消されたことが述べられている。⁽¹⁰⁾

このようにアメリカの都市伝説は、TDLの噂と話の構造が同じである。

それでは、この「誘拐未遂」の伝説が、TDLの噂の原型なのだろうか。

「遊園地の人さらいの話は、アメリカで発生した都市伝説が日本に入り、日本特有の背景をディテールとして加えながら、実際に起きた話として広がったものののだ。⁽¹¹⁾」

このように考えれば、私たちのTDLの噂の原型を探す試みはここで終了する。

だが、こういう場所で子供が誘拐されるという噂は、よくきかれる持続的な噂であり、子供の安全、そして子供の将来についての親たちの不安のシンボルなのである。⁽¹²⁾ また、よくある危険なことについて、人びとに警告したり、気をつけるよう注意したりする上で、実用的な働きをしている。⁽¹³⁾

さらに、それではアメリカの都市伝説はどこから生じたのかという新たな疑問も出てくる。

そこでTDLの噂の原型を探す試みには、大人の臓器盗難の噂と臓器売買のために子供が誘拐されるという噂を検討することが不可欠である。

四

本節では、成人男性が知らない間に(眠っている間に)臓器が盗み取られていたという臓器泥棒の噂を取り上げてみよう。盗まれた臓器としてあげられるのは、大抵は腎臓で、まれに肝臓である。腎臓は、人体に二つあって一つ摘出しても生存に支障はない。フィリピン、インドなどでは、死者の腎臓の移植ばかりでなく、生者の腎臓の売買とそ

の移植が実際に行われている(いた)。このような事情があるので、腎臓が盗まれる対象となるのである。

(1) プレーメンの夫婦がイスタンブールへ行った。ふたりはバザールをぶらついた。年上の夫の姿が見えなくなった。警察が捜したが、見つからなかった。数日後、病院へ行くように電話があった。病院に海岸で意識を失っていた男が運び込まれていたが、夫だった。容態は芳しくなかった。プレーメンに戻って検査を受けた。彼の右側の腎臓の位置に真新しい縫合された傷があった。つい最近、腎臓が取り去られていたことが判明した。⁽¹⁴⁾

(2) (スペインの) マジョルカ島で人が誘拐され、秘密の手術室で肝臓か腎臓を抜き取られ、のちに半死半生で発見される。……毎年、この島だけで二〇人以上の旅行者が消えている。⁽¹⁵⁾

(3) 長期休暇でトルコに行った時、ツアー客のひとりが突然いなくなった。皆が警察へ駆け込む。すると警察は、失踪者は数日たてば消えた場所にまた現われる、という。そしてその言葉どおり、三日後、彼はバザールに倒れていた。いくらか朦朧状態だったのは、腎臓を取り去る手術を施されていたからだだった。⁽¹⁶⁾

(4) 週末にニューヨークへ遊びに行った若者グループの一人が、とあるバーで出会った女性に魅了され、仲間に自分とは彼女の所で一晚過ごすから、後で連絡をとると言う。翌日遅くなってから、彼は電話で「何々ホテルの何号室にいますと思うが、具合が悪いので、迎えに来てくれないか」と言った。友人たちがホテルに行くと彼は衰弱してベッドに横たわり、シーツに血が飛び散っていた。彼を起こそうとした時、彼の背中に外科手術を施したばかりの縫合跡があり、多量の血が付いていたので急いで病院へ連れていった。病院で、彼の腎臓の一つが摘出され

ていたと分かり、臓器のブラックマーケットで売るために摘出されたという結論が下された。⁽¹⁷⁾

(5) ワシントン D. C. の女性三人と男性一人のグループが仕事でニューヨークへ行った。ある金曜の夜、男性はバーに残り、女性たちはホテルへ帰った。日曜の朝彼女たちのところへ電話をかけてきた。「お願いだ、助けに来てくれ」と彼は頼み、その場所を教えた。彼女たちがタクシーでそこへ駆けつけると、彼は金曜日と同じ服装をして、建物にもたれるように横たわっていた。彼は汗びっしょりで朦朧としていたので病院へ連れていくと、モルヒネを打たれ腹部に――〇針縫った跡があり、腎臓の一つがなくなっていることが分かった。医者によると、その手術は「プロの仕業」であった。⁽¹⁸⁾

(6) 海外旅行に行ったヨーロッパ人が、バンコク（ブラジル、イスタンブール、バルカン、北アフリカ）のバーへ出かけたあとで腎臓を盗まれていた。臓器泥棒ギャングがいるという。⁽¹⁹⁾

(7) ハワイに家族旅行に行ったら、父親だけがいなくなり、その後ホテルの前で意識を失って発見された。父親の身体には縫ったあとがたくさんあって、腎臓（肝臓）をとられていた。⁽²⁰⁾

これらの噂話の構造は共通である。すなわち、観光地ないしはニューヨークへ行った男が、誘拐され（あるいは美女に誘惑され）、秘密裏に腎臓を摘出されて意識朦朧状態で発見される。腎臓はブラックマーケットで売買される、という。ヨーロッパ、アメリカ、そして日本で同じような噂が広がっている。臓器移植が実用化されたが、移植用の臓器の不足も叫ばれている。法律等で禁止されているものの、臓器の売買が秘密裏に行われているのではないか、知

らない場所で自分が臓器泥棒の被害者になるのではないか、このような漠然とした不安を反映した噂であろう。

五

「子供が誘拐されて臓器を取られる」という噂もまた世界中に広く流布しているのである。筆者の気が付いたものだけあげてみる。

(1) メキシコ

メキシコ市郊外の貧民街に住む小学生が学校から帰宅後、何者かに連れ去られた。警察の捜査は難航。一年後に小学生が自宅周辺で発見された。一見、元氣そうに見えたが、背中上部に切開手術の跡があった。事の実情は不明だが、しばらくして「手術は腎臓を切り取って、移植するためのものだったのではないか」との風評が立った。また、メキシコでは米国人などに養子として売るための幼児誘拐が多いといわれる⁽²¹⁾。

(2) グアテマラ

① 94年3月末、グアテマラを旅行中のアメリカ人女性が暴徒に襲われ、メッタ打ちにされ重体となった。現地の一女性が「人さらい」と叫んだのがきっかけだった。

「外国人には気をつけろ。やつらは子供をさらって臓器を切りとり、移植用に売り飛ばすんだ。」
彼女は中米各地に以前からあるこの噂の犠牲者となった⁽²²⁾。

② 00年4月末、日本人ツアーグループが現地住民に襲われ、日本人、グアテマラ人各一人が死亡した。現地では

「(カルト集団とともに) 外国人が来て子供をさらう」という噂が流れていた。誰かが「子供が連れていかれる」と叫び、騒ぎが起ったという⁽²³⁾。

(3) ブラジル

①誘拐団は三人組。ピエロの格好をした男性が二人と、バレリーナの服を着た女性だ。彼らは子供を車に誘い込んで殺す。さらには遺体から臓器を抜き取り、移植用としてアメリカなど先進国に売り飛ばすという。そして、誘拐の翌日、ゴミ袋に入った子供の遺体はその子の自宅に届いた。遺体からは臓器がいくつも抜き取られていた⁽²⁴⁾。

②子供や若者が誘拐され、先進国の金持ちの患者に移植する臓器の国際的取引に供するため切斷されるという。アメリカ人、時には日本人の代理人が運転する大きな青色と黄色のバンが目撃されるが、その車は貧困者の多い地域で迷子や宿なしの子供を捜し回っている。子供たちは捕まえられバンの後部に押し込まれる。その後、心臓、肺、肝臓、腎臓、眼球の欠けている遺体が、道端に、サトウキビの間に、病院のゴミ捨て場に姿を現わす⁽²⁵⁾。

③リオデジャネイロのあるショッピング・モールで二人の子供が誘拐された。家に戻ったとき、腎臓を盗られていた⁽²⁶⁾。

(4) コロンビア

違法な臓器の取引が中南米では行われているという。何人かのスラムの子供たちが誘拐され、ホームレスや精神に障害のある人々が大量に行方不明になっている。犠牲者の多くは死体で発見され、運よく生き残った者でも目が奪われ、腎臓も奪われていた⁽²⁷⁾。

(5) イタリア

①子供たちを誘拐しようと町を走っている黒い救急車がある。正体不明の一団が身の毛のよだつ臓器売買に供するため子供たちを誘拐するらしい。⁽²⁸⁾

②ローマの北の田舎を巡回している移動臓器移植バンがある。⁽²⁹⁾

(6) ポーランド、ロシア

①牧師か尼僧に扮した者が、キャンディーをあげると言って小さな子供たちを黒いリムジンの中へおびき入れたい。不運な子供たちは再び生きて見つかることはなかった。どうやら誘拐犯たちは外国で売るために犠牲者たちから血液を抜き取り、子供たちの遺体を生ゴミ入れの中に捨てたらしい。⁽³⁰⁾

②貧しい子供たちの臓器が金持ちのアラブ人の移植手術のために売買されている。⁽³¹⁾

このように、臓器を密売買するために子供たちが誘拐されるという噂は、中南米からヨーロッパまで広がっている。それでは、これらの噂は、各国で別々に生まれたのであろうか。

実は、臓器密売買のために子供が誘拐されるという噂は、中米のホンジュラスで生まれ、南米、そしてヨーロッパへと広がったことが確認されている。この噂の流布については次節で取り上げることにして、なぜ、この噂が中米で生まれ、南米で受け入れられたのか、その理由を考察しておこう。

この「子供の臓器売買の噂」は、四つの要因によって形成されたという。第一に、欧米マス・カルチャーのホラー、スリラーなど不安をかきたてる題材がある。第二に、発展途上国で広げられる白人人食い鬼の不安がある。それは、欧米支配の寓話でもある、例えば、ペルーでは背の高い白人がナイフでインディオを切り裂き、血液や脂肪を抜き取

るといわれた。また、リマでは機関銃をもった外国人が通りを徘徊し子供を車に誘い込み、目をくり抜いてから放り出すといわれた。第三に、ある集団の子供たちが邪悪な見知らぬ者によって誘拐され、殺されるという話は、太古からの寓話である。敵対する外集団はスケープゴートとして象徴的に攻撃されている。未来の比喩である子供たちが犠牲者となり、生命のシンボルである血を取られ切断されるのである。最後に、現実の大量殺人事件の影響が考えられる。⁽³²⁾

この噂が中南米でうけいれられた背景には、この地域の悲惨な現実があった。中南米の多くの国々では軍事政権や内戦が続き、誘拐、行方不明、政敵に対する拷問や暗殺は日常的で、肉体は毀損された。生命の安全は保証されなかった。また、ブラジルでは、金持ちらは高度の医療を享受できるが、貧しい人々は十分な治療を受けられず、病院は薬づけにしたり不必要な手術を行っている。スラムの住民は死ねば医療費のかわりに臓器が取られ、死体は放置される。そして、ストリートチルドレンの命が殺し屋集団に狙われているという。

さらに、これらの地域から欧米先進国への国際的養子の問題もあった。欧米人は多額の謝礼を払ってまで子供をほしがった。貧困な家族、若い母親から子供を買いたり、誘拐したりする事件もしばしば起きていた。合法的養子の場合でも異国にいる養子の将来は不安であった。そして、国際的な臓器売買が実在していた。

要するに、中南米では貧しい人々と金持ちとの間に大きな生活状態の格差があり、しかも南の貧しい国から北の豊かな国への不平等な生命の交換があったのである。この噂は、彼らや子供の生命が危機に陥るかもしれないと警告する。無邪気な人間を誘拐し外国人のために臓器を奪うというのは、先進国による途上国の資源略奪の隠喩とも考えられる。

第三世界の幼児の豊かな国への養子と移植のための臓器の売買という現実があり、後述するような秘密の「赤ちゃん農場の発見」や赤ん坊の誘拐が引き金となり、子供たちに危害が加えられるという太古からの恐怖の寓話が浮上し

た。それは、彼らがおかれている悲惨な状況を説明し、豊かな先進国の陰謀を非難しているのである。⁽³³⁾

六

この「子供の臓器売買の噂」あるいは「ベビー・パーツ・ストーリー」の発生と流布の経緯は、フランスの民俗学者ペロニック・キャンピオン・バンサンとアメリカ文化情報局(USIA)⁽³⁴⁾の調査によって解明されている。「ラテン・アメリカで誘拐された赤ん坊は、アメリカで臓器移植のための部品として用いられている」という話は、一九八七年に生まれ、共産圏の反米プロバガンダの一項目として、体系的ディスインフォメーションとして広められてきたのである。

八七年の動きを追ってみよう。

一月二日、ホンジュラスの日刊紙が「外国でホンジュラスの子供たちが臓器売買のために解体される」という記事掲載し、秘密の子供農場が発見された、外国人が身障児を養子にするのは、解体し北米で移植に用いるためだと書いた。翌日、これらは想像だと話した本人もその上司も否定したが、中南米のメディアが否定部分抜きで取り上げた。二月五日、グアテマラでも秘密の子供農場が発見されたと報じられ、すぐ否定されたが、オランダとユーゴの新聞が三月に取り上げた。

四月五日、ソ連の新聞「プラウダ」が「数千人のホンジュラスの子供たちがアメリカに送られ、金持ちの子供たちへの臓器ドナーにされている」と報じた。タス通信によりこの記事が世界中に配信された。

五月、欧州議会に臓器売買非難案が提出されたが、総会では決議されなかった。

七月二五日、ソ連紙「イズベスチヤ」が「アメリカの子供たちを救うために必要な腎臓、眼球を摘出する屠殺医た

ち」と書いた。

アメリカの法務省、FBI、米食品医薬品局等は、USIAの後押しでこの噂を否定した。

八八年一月にはグアテマラでイスラエル人の養子ネットワーク発見と、八月にはパラグアイでブラジルの赤ん坊農場発見と報じられ、いずれもすぐ否定された。

同年八月、国連人権委員会に国際民主法律家協会（IADL）という親ソ団体が報告書を提出、取り組みを求めた。報告書は却下されたが、ハイチで親に捨てられた子供たちから取られた臓器がフロリダの病院へ送られている、金持ちの子供用の病院で移植するためにベネズエラの子供たちから角膜が取られている、メキシコでは血を抜かれた子供たちの死体が発見される、といった噂を引用していた。

同九月、欧州議会で「人体部品として用いるために子供たちを犠牲にすること」を非難する決議案が採択された。前述の報告書が根拠とされた。

同一〇月、米国務副長官は、噂を否定し、欧州議会の決議に公式に抗議した。「ニューヨーク・タイムズ」紙も反論記事を掲載した。

八八〇八九年、ソ連のメディアと世界中の親ソ・メディアは、この噂を何回も取り上げたが、一般的には二級の反米ストーリーとして受けとめられた。

ところが、噂は九〇年代に再び浮上してくる。

九三年一月、イギリスとカナダで「ボディ・パーツ・ビジネス」というドキュメンタリー番組が放映された。それは、グアテマラ、ホンジュラス、アルゼンチン、ロシアにおける人体臓器・組織の売買をセンセーショナルに暴露したが、子供の臓器売買について信頼できる証拠に基づいてはいなかった。

また、同年末、アルゼンチン、コロンビアの事例を取り上げたテレビ番組「臓器泥棒」もフランスで放映されたが、

同様に誤ったものだった。

これらに先立って、九二年八月、「ル・モンド・ディプロマティック」誌に子供の臓器売買についての正確でない記事が掲った。

九三年九月、欧州議会は「移植用臓器売買禁止決議」を採択した。「ル・モンド・ディプロマティック」誌の記事が根拠とされ、子供の臓器売買の噂に信憑性が与えられた。

九四年一月、児童売買、児童売春、児童ポルノに関する国連の特別報告、同年三月の拷問に反対する世界組織の理事の報告も噂に信憑性を与えた。

同年九月、イタリアで家族大臣が「健康上の目的での子供の不法な売買の存在は考えられる」と発言、彼は非法な養子に言及しただけで、保健大臣も秘密の臓器移植手術は不可能だと言明したが、ドイツの新聞は「臓器マフィア／三千人の子供たちを虐殺／恐ろしい嫌疑を大臣が確認」との大見出しで、マフィアが第三世界から養子として子供たちを密輸入し、秘密の病院で殺害し、臓器を取っている、無邪気な子供たちは金持ちの患者に肝臓、腎臓、心臓を供給していると報じた。

同年五月、スペインで『スぺア・パーツ・チルドレン』という本が出版され、同年七月にはブラジルの新聞に連載記事が出た。いずれもこの噂を取り上げていたが、事実に基づいたものではなかった。

このように、子供の臓器売買の噂は、十分な根拠がなかったにもかかわらず、マス・メディアの報道で火がつければ、欧州議会などが「真実」だとお墨付きを与えたのである。また、共産陣営の反米キャンペーンの一環でもあった。アメリカは文化情報局を中心に噂への反撃を試みた。九四年にグアテマラで米人女性が襲われ重傷を負った事件も発生し、単なる噂として放置するわけにはいかなかった。

この噂を否定する根拠とされたのは、つぎのような事実だった。第一に、アメリカでは臓器売買が禁止されている

うえに、全米の臓器移植はすべて臓器分配ネットワークが管理しており、闇市場が存在する余地はない。臓器移植には高度の技術が必要で大勢の医者が関与するので、秘密の移植手術は不可能である。第二に、アメリカでは臓器が輸入されることは殆どなく、輸入先もカナダが主である。角膜は余っていて、ヨーロッパ、アジア、中東、アフリカ、中南米へ輸出している。噂の主張とは逆に、アメリカから途上国へ人体組織が送られている。第三に、角膜はともかく、摘出された臓器の寿命は短いので、適合する移植患者を探し回することは考えられない。

しかも、テレビ番組で角膜を摘出されて視力を失ったと言った少年は、実際には感染病が原因で視力を失っていた。もう一人はうそをついていた。

このような事実をつきつけられても、噂を真実だと信じている人たちは、臓器市場は実在し、成長を続けている、アメリカ政府が臓器市場の存在を公式に否定していること自体、問題が存在する証拠だという。「高い地位の人物が、完全否定でいこうと決めたのは明らかだ」と、噂を信じ込んでいる。⁽³⁶⁾

前節で述べたように、中南米の貧しい人びとには噂を真実と信じる素地があった。また、アメリカに批判的な親ソ的な人びとばかりでなく、善意の人びとも、この噂を信じた。この程度のことはありうることでと。その結果、この噂は各国で都市伝説として広まっているのである。

七

ここでヨーロッパの歴史に眼を転じて、子供たちが誘拐されて臓器をとられる（身体を毀損される）という噂を取り上げてみよう。その候補として二つの噂が考えられる。一つは、一七五〇年のパリにおける子供集団誘拐事件であり、もう一つは、ユダヤ人がキリスト教徒の子供たちを誘拐して殺す、という噂である。まず、一七五〇年のパリ

の光景を眺めてみよう。

一七五〇年春、パリの街角から子供たちの姿が消え始めた。登校の途中で、親にいわれた用事に出かけて、両親の面前でさえも。どんな子供も安全ではなかった。すぐに驚くべき噂が広まった。私服の警官がミシシッピー植民地へ植民者を送るために貧しい人びとの子供たちを誘拐していると。また、この子供の誘拐の目的は、癩病やみの王子がいて、その人が治癒するためには人間の血の風呂に一度ないしはそれ以上つかる必要があり、子供の血以上に純粋な血はないので、子供を捕まえて四肢から血を採り、彼らを犠牲にするのだという。

実際、首都へ流入してくる浮浪者、悪漢などの好ましくない連中を逮捕し監獄へ送り、強制労働を課す、強圧的権力が警察に与えられていた。権力を乱用する警官もいた。そして、民衆と警察との間で高まっていた不安と嫌疑はついに五月二二、二三日、パリのあちこちで大勢の人びとを巻き込む騒乱事件を引き起こした。ある警官が子供を連行しようとした。群衆が形成され、子供を取り返し、警官を追跡、彼をリンチし死亡させた。数日間の騒乱事件の犠牲者数は多目にみて約二十名といわれる。

子供たちが不意に、社会階層や年齢に関係なく、子供たちの抗議を聞き入れることなく、調書なしに、脅迫をともなつて警察に逮捕されたことに疑いの余地はない。一七四九年一月から五〇年五月にかけて行われた「誘拐」の数は数百人と推測されている。

浮浪・放蕩少年のみならず、平常な生活をいとなんでいる子供、家計維持の役割を担っている子供も、拉致していた。無差別逮捕が噂を生んだ。パリの街頭から放蕩者や浮浪者を排除しての公共の安寧確保と、西インド諸島やルイジアナ向けの植民者を強制的に徴集しようというお上の意図は、パリの住民に知られていた。そこで、「警察が植民地へ送るために子供たちを誘拐している」という噂が生まれた。だが、この噂だけでは、誘拐の理由は完全に説明できなかった。なぜなら植民地へ入植させるのなら、子供より成人の方がふさわしいのではないか。公共の安寧確保の

ためにも成人の浮浪者や悪漢を捕まえた方が好ましいのではないか。また、子供たちを両親からさらうよりは、父も母もない孤児や捨てられた子供たちを利用すればいい。植民地の施設のために幼い子供たちが必要だったら、孤児院の子供たちがいるのに。

そこで、「癩病やみの王子を治療するために人間の血の風呂に入る必要がある、子供たちを捕まえて血を採っている」という噂が持ち出される。この噂により、子供たちが誘拐される理由が説明できる。

この血の噂は、癩病の王子と聞いていたが、この噂にはバリエーションがあった。

「国王が癩病で、現代のヘロデ王よろしく、血の風呂につかっている。」

「若い男の子をさらって血をとる。その子らはずっと行方不明で、彼らの血は、人間の血でしか治らない病気にかかった王女をいれる血の風呂につかわれる。」

それでは、どこからこのような怪奇な噂が生じたのか。

一七三三年、王太子が癩病にかかっているらしいという噂が流れていたが、人びとを信じさせるまでにはいかなかった。一七四九年、パリ訪問中のロシアの王子が恐ろしい癩病治療の秘法を少数の貴人に打ち明けたらしい。それは、若い血の輸血だった。子供の体の血を全部ぬいて死なせ、その血を病人の血管に注入することだという。この噂が翌年広まったのだろうか。

そうではないと考えられる。フランスには噂に出てきたような癩病の王子も国王も王女もいなかった。たとえいたとしても、こんな治療法を採用するはずはなかった。実は王子、国王、王女といっても国王が噂のターゲットであつたと考えられる。国王ルイ十五世は「現代のヘロデ王」としばしば呼ばれていた。

ユダヤ・キリスト教的伝統においては、癩病は罪のしるしであり、すぐれて王の病とみなされていた。また、癩病は体液理論によれば、熱く湿った血の乱れと関連している。それは、純粋でつめたい子供などの血で治療できるとさ

れた。しかも、癩病は魂の病氣である。傲慢か信仰の欠如で、神の意思に衷心から身をまかせない者をおそうとされていた。

「現代のヘロデ王」ルイ十五世は、怠惰で無氣力で、ものぐさでエゴイストだった。王は人の不幸にたいして無関心で、冷酷な男だ、浪費家だがけちだ、といわれていた。「子供をさらって、癩病の王が血の風呂につかる」という噂は、父親たるべき王がもはやその子たる臣民を愛さず、その血をむさぼるのだ、といっていた。一七五〇年の反乱は、「国王と臣民の絆は、愛と忠誠の絆であるべきだ」という政治的理想の表現でもあった。国民はもはや国王を愛していなかった。⁽³⁷⁾

その後、一七六八年にリヨンのオラトリオ会修道院が群衆に襲われた。その暴動は、司祭たちが片腕の王子を泊めていて、「毎晩、修道院の周りで子供を拉致し、その腕を切り取ってそれを王子といわれる者にすげようとしている」と指弾されたために起こった。暴動で二十五人の負傷者が出た。かつてはこの異常な外科手術は不可能と思われなかった。追放されたイエズス会派の企む陰謀についての不信の念があった。そして、リヨンその他で子供の誘拐の噂が周期的に流れていた。これらが複合して、このような話が出来上ったのであった。⁽³⁸⁾

八

オルレアンの女性誘拐の噂の標的となったのが、ユダヤ人であったことはすでに述べた。それでは、その噂は単発的な噂であったかといえば、パリ、リモージュ、リールなどでも同じような噂が聞かれていた。オルレアンの噂は、地方のものでも、孤絶したものでも、偶発的なものでもないひとつの神話の、表面に現れ出たごく薄い層にはかならない。それは無意識の地下の深層から発したもので、ひとたび起こると、野蛮な力として顕現するし、抑圧されて地

下の闇のなかに戻ったそれは、別の仮面をつけて再び現れ出る新たな機会をうかがっているのである。⁽³⁹⁾
 その神話とは何か。西洋では何百年來、ユダヤ人は神を殺した者、子を殺した者と中傷され続けている。この中傷は、十一世紀の十字軍遠征による異教徒攻撃と十四世紀のペスト大流行に対するスケープゴート探しによって強められた。

ユダヤ人は礼拝行為の際に幼児の血を飲むと訴えられた。それは割礼の儀式や、過ぎ越しの祭りに小羊を犠牲にする、あるいはその血を門柱に塗るという聖書の記述によるのだらうという説もある。⁽⁴⁰⁾ また、ユダヤ人が毎年過ぎ越しの祭りの前に、キリスト教徒の子供を殺し、その血で種なしパンを焼いているという中傷も流された。⁽⁴¹⁾

ユダヤ人による儀式のための幼児殺害という神話は、十二世紀半ば頃から知られるようになった。そのきっかけとなった事件は、何だったのか。

一一四四年三月二〇日、復活祭と過ぎ越し祭りの直前、東アングリアのノリッチでウィリアムという少年が行方不明になった。彼が最後に目撃されたのは、ユダヤ人の家に入るところであった。二日後、無数の刺し傷がある少年の死体が森の中で発見された。少年の母と地方の司祭は、キリストの受難の再現をしたとして、ユダヤ人を殺人の罪で訴えた。スペインのユダヤ人議会は毎年儀式的殺人が起こるべき町をくじで選んでおり、一一四四年はノリッチがくじに当たったのだという主張もあった。こうして儀式的殺人と血の中傷というユダヤ人に対する誹謗が生まれた。また、奇跡が起こり、少年は聖人とされた。⁽⁴²⁾

その後、一二三五年のクリスマスに、ドイツ中部のフルダで粉屋が焼失して五人の子供たちの死体が発見された。現地のユダヤ人たちに少年殺しの嫌疑がかけられ、暴徒がユダヤ人を襲って三十四人も殺した。その後、ユダヤ人が少年たちを殺し、宗教的儀式のために血を取った。そして、殺人を隠蔽するために粉屋に放火したという話がつくられた。⁽⁴³⁾

一四七五年、イタリアのトレントでシモンという二歳の少年が川遊び中に溺れて姿が見えなくなった。彼の死体はユダヤ人の家の下から発見された。ユダヤ人が殺人の犯人とされ、拷問によって儀式殺人の自白が強要された。シモンは殉教者とされ奇跡を行ったと言われている。⁽⁴⁴⁾

一八一九年、ライン下流地方のドルマーゲンで七歳のマリイ・カタリーナが行方不明となった。懸命な搜索にもかかわらず、彼女は発見されなかった。ユダヤ人がときどきキリストの血を手に入れなければならないので、その子を捕まえたのだ、という声が生じた。三日後に、子供の死体が発見された。子供は血をユダヤ人に絞取られたのだという噂が流れた。子供は血を吸い取られ、七百もの傷口から血が流れていたという噂も聞かれた。噂は少女を巡礼者に取り囲まれた聖人像に変えた。⁽⁴⁵⁾

この種の話は、枚挙に遑がない。しかも、儀式殺人の話は、いつも似ていた。子供が姿を消し、両親が捜し回る。発見されたとき、子供の身体にはいくつもの注目すべき傷が見られる。子供はその地のユダヤ人たちに儀式的な目的で殺されたのだ、という結論になる。⁽⁴⁶⁾

儀式殺人の廉でのユダヤ人の裁判は、中世を通じて百五十件以上あったという。⁽⁴⁷⁾

ペスト大流行時にはユダヤ人はスケープゴートにされた。この恐ろしい疫病の襲来は、それが人間の悪意によって蔓延した病気であるという確信を人々に生じさせた。「ユダヤ人たちが、ひそかに海を渡って当地に運ばれた毒物を使いキリスト教徒を抹殺しようとした」という噂が流れた。⁽⁴⁸⁾ユダヤ人たちは拷問を受けて、井戸や水溜りに毒をまいたことを自白した。多くの町でユダヤ人は生きたまま焼かれた。中央ヨーロッパの三百以上のユダヤ人共同体のうち約三分の二が、虐殺の犠牲となった。⁽⁴⁹⁾

TDLの噂の起源を探す試みもどうやら最終段階に來たと思われる。

まず、TDLの噂を始め、それと関連のありそうなオルレ안의噂、アメリカの都市伝説、臓器泥棒の噂、臓器目的の子供誘拐の噂、一七五〇年バリの子供集団誘拐事件、ユダヤ人の儀式殺人の噂、其々の話の構造をもう一度確認しておこう。

(1) TDLの噂

TDLのトイレに一人で入った子供が麻酔薬を打たれ、誘拐されそうになる。髪は刈られ（髪の色が変えられ）ていたが、はいていた靴（靴下）が同じだったので発見され、東南アジア系の犯人は捕まった。誘拐の目的は臓器売買だった。

(2) オルレ안의噂

ユダヤ人の経営するブティックの試着室に若い女性が入ると催眠性の薬物が打たれ眠らされて地下室へ移される。その後、外国の売春街へ運ばれる。

(3) アメリカの都市伝説

デパート、ショッピング・モール、遊園地などで子供が行方不明になり、トイレで発見される。麻酔薬で眠らされ、髪は刈られ、服が替えさせられていた。

(4) 臓器泥棒の噂

観光地（ニューヨーク）へ遊びに行った男が、誘拐され（美女に誘惑され）、秘密裏に腎臓を摘出される。腎臓はブラックマーケットで売買される。

(5) 臓器密売買のための子供誘拐の噂

子供が外国での臓器密売買に供するために誘拐される。

(6) 一七五〇年バリにおける子供集団誘拐事件

癩病の王子を治療するために人間の血の風呂に入る必要があり、子供たちを捕まえて血を採っている。

(7) ユダヤ人の儀式殺人の噂

ユダヤ人が過ぎ越しの祭りなどのときにキリスト教徒の子供を誘拐して、儀式で殺して血を採る。

つぎに、TDLの噂から主要な構成要素を取り出してみると、子供の誘拐、麻酔薬、臓器売買、東南アジア系に対する人種・民族的偏見、髪の毛の毀損、目印となる靴、が挙げられる。この中で、アメリカの都市伝説だけに出てくるのが、髪の毛の毀損と靴である。髪の毛については既に紹介したが、靴については、靴墨を黒く塗られていたという話があり、TDLの噂への影響が考えられる。これら二要素を除いて、子供の誘拐、麻酔薬、臓器・血取り、人種・民族的偏見といった四つの要素が他の話に含まれていないか、一覧表にしてみた。

表1 噂の構成要素

噂名	子供の誘拐	麻酔薬	臓器・血取り	人種的偏見
ユダヤ人	○		○	○
バリ一七五〇	○		○	
オルレアン		○		○
米都市伝説	○	○	○	○
臓器泥棒		○	○	○
臓器のため 子供誘拐	○		○	○
TDL	○	○	○	○

○…噂話に要素が含まれることを示す。

話の発生時期の古い順に並べた表一をみると、アメリカの都市伝説が四要素を含んでおり、話の構造からみれば、TDLの噂の原型と考えられる。(髪の毛と靴を加えれば、さらにこういえる。)したがって、TDLの噂はアメリカの都市伝説が日本に入り、日本型に変化したものである。それは子供の安全に対する親の不安を表わしたもので、子供を一人にすると危険な目にあうという警告を伝えているという解釈も間違っていない。だが、麻酔薬という要素はオルレ안의噂以下の二〇世紀後半の噂に共通にみられるので、子供誘拐の噂の新しい要素と考えられる。このように考えると、ユダヤ人の儀式殺人の噂が子供誘拐の根元的な話といえるのではないか。この噂がオルレ안의噂に姿を変えて現われ、その後アメリカの都市伝説となって出現したことも考えられるのである。なお、流言研究者のカブフェレは、流言の永続的な九つの主題を挙げているが、その中に異国人への恐怖と子供の誘拐とを含めている⁽⁵⁰⁾。こうして、TDLの噂の原型を探す試みは、異なる人種・民族に対する偏見、不信という人間の心理の深層に辿り着いたのである。

それでは、つぎのように臓器密売買のための誘拐や人身売買が現実に行われていると断言できるのであるか。

「医療施設が恐るべき目的のために悪用されかねないのである。時には誘拐され、時には現金で買われた子供や若者から臓器を取り出し、そのおなじ医院や病院内で、しばしばドナーの身元も知らない重病人や危篤患者に移植する。こうした患者たちは、巨額の代価を払ってえた臓器を供給するために時としてドナーが死ぬことがあるということも知らない。かかる裏ビジネスの存在はよく知られている」⁽⁵¹⁾。

「経済のグローバル化は貧しい国々を一層痛めつけ、性や臓器摘出を目的に子どもが売買されるケースはアジアやフリカ、南アメリカから中欧、東欧にまで広がっている」⁽⁵²⁾。

売春や児童ポルノなどの性のためにはともかく、臓器摘出のために子供の人身売買が行われているという事実は、確認されていない。噂の世界の出来事だと信じたい。

注

- (1) R. L. Rosnow, Rumor as Communication: A Contextualist Approach, *Journal of Communication*, 38, No. 1, 1988, P. 12-28.
- (2) J・ブルンヴァン(行方均訳)『チョーキング・ドーベルマン』新宿書房、一九九〇、一二二頁。
- (3) (7)は実際の出来事とされているが、話の構造からみて、噂と考えられる。
- (4) E・モラン(杉山光信訳)『オルレアンのおわさ』みすず書房、一九七三、一五頁。
- (5) 山本節『魔都幻想「消えた新妻」の噂』『神話の海』大修館書店、一九九三。
- (6) Nancy Sheper-Hughes, Theft of Life: The Globalization of Organ Stealing Rumours, *Anthropology Today*, Vol. 12 No. 3, 1996, P. 4.
- (7) J・ブルンヴァン(大月隆寛他訳)『消えるヒッチハイカー』新宿書房、一九八八、二五八〜九頁。
- (8) 同前書、二六一頁。
- (9) J・ブルンヴァン『チョーキング・ドーベルマン』一二二〜二六頁。
- (10) J・ブルンヴァン(行方均訳)『メキシコから来たベット』新宿書房、一九九二、一五七頁。
- (11) 宇佐和通『あなたの隣の「怖い噂」』学習研究社、二〇〇二、一〇八頁。
- (12) Jeffery S. Victor, *Satanic Panic*, Open Court, 1993, P. 52.
- (13) J・ブルンヴァン『メキシコから来たベット』一六三頁。
- (14) R・ブレードニヒ(池田香代子他訳)『ジャンボジエットのネズミ』白水社、一九九三、八九〜九〇頁。
- (15) P・ヤーミン(中野京子訳)『失踪』荒地出版社、一九九五、五四頁。
- (16) 同前書、三五〜六頁。
- (17) J・ブルンヴァン(行方均訳)『赤ちゃん列車が行く』新宿書房、一九九七、一八八〜九頁。
- (18) 同前書、一八九〜九〇頁。
- (19) Todd Leventhal, The Child Organ Trafficking Rumor: A Modern 'Urban Legend', P. 5. (<http://fb10cdrom.fb10.uni-bremen.de/cd/infousa.usiaweb/usi/baby.htm>)
- (20) 池田香代子他『ユアスの白い糸』白水社、一九九四、九三頁、おもしろ情報ネットワーク編『世間にはびこるウワサの大

検証」カンガルー文庫、一九九五、四七頁。

- (21) 『週刊時事』一九九一・三・九、五〇頁。
- (22) 『Newsweek 日本版』一九九四・四・二〇、九頁。
- (23) 毎日新聞、二〇〇〇年五月一日付夕刊。
- (24) 『Newsweek 日本版』一九九五・七・一二、五三頁。
- (25) Nancy Sheper-Huges, op. cit. P. 3.
- (26) Todd Leventhal, op. cit. p. 28-29.
- (27) FRIDAY, 一九九三・一一・五、三三頁。
- (28) J・フルンヴァン『赤ちゃん列車が行く』三〇九頁。
- (29) Nancy Sheper-Huges, op. cit. P. 4.
- (30) J・フルンヴァン『赤ちゃん列車が行く』三〇四頁。
- (31) Nancy Sheper-Huges, op. cit. P. 3.
- (32) Veronique Campion-Vincent, *The Baby-Parts Story: A New Latin American Legend, Western Folklore*, 49. 1990. P. 17-22.
- (33) Nancy Sheper-Huges, op. cit.
- (34) Veronique Campion-Vincent, op. cit.
- (35) Todd Leventhal, op. cit.
- (36) 『Newsweek 日本版』一九九五・七・一二、五四頁。
- (37) 以上の記述は、Ariette Farge, Jacques Revel, *The Vanishing Children of Paris*, Harvard University Press, 1991 によった。なお、仏語書の翻訳は、三好信子訳『ベリリー七五〇 子供集団誘拐事件の謎』新曜社、一九九六。
- (38) ジャン・ドリュモワ（永見文雄他訳）『恐怖心の歴史』新評論、一九九七、三三四頁。
- (39) 同前書、二八一〜二頁。
- (40) K・ベルクドルト（宮原啓子他訳）『ヨーロッパの黒死病』国文社、一九九七、一八八頁。
- (41) J・カッツ、Z・パハラハ『全訳世界の歴史教科書シリーズ27 イスラエル』帝国書院、一九八二、三四〇頁。
- (42) P・ジョンソン（阿川尚之他訳）『ユダヤ人の歴史 上巻』徳間書店、一九九九、三四八〜五一頁。

- (43) J. Victor, op. cit. P. 285.
- (44) ハンス・ヨアヒム・ノイバウアー (西村正身訳) 『噂の研究』青土社、二〇〇〇、一七七頁。
- (45) 同前書、一七九頁。
- (46) 同前書、一七六頁。
- (47) ジャン・ドリュモワ、前掲書、五三九頁。
- (48) K・ベルクドルト、前掲書、二〇〇頁。
- (49) F・ザイプツ (水野藤夫他訳) 『図説中世の光と影 (下)』原書房、一九九六、四五六頁。
- (50) J・カプフェレ (古田幸男訳) 『うわさ』法政大学出版局、一九九三、一六四頁。
- (51) B・フリーマンツル (新庄哲夫訳) 『ユーロマフィア』新潮社、一九九八、二二四頁。
- (52) 「根絶の決意を固めよう」朝日新聞社説、二〇〇一年十二月二五日付。